



## 好事例 file. 1

くずりけおりこうぎょう かぶしがいいしゃ

# 葛利毛織工業株式会社

- 所在地：愛知県一宮市木曾川町玉ノ井宮前1
- 業種：毛織物業
- 設立：1912年
- 電話番号：0586-87-3323
- 従業員数：21名



## 「100年の決意」からの好転

日本を代表する毛織物産地である愛知県・尾州の「葛利毛織工業株式会社」は、高品質な毛織物を生産する企業として、100年以上の歴史を重ねており、平成21年度には愛知ブランド企業の認定を受けています。同社は1年間で、4人ほどの新規採用を行った実績もあります。果たしてその理由とは？

### ❁ 旧式のシオンヘル織機によるモノづくり

葛利毛織工業は、1932年（昭和7年）に導入したシオンヘル織機を使って毛織物を生産しています。シオンヘル織機とは、昔ながらの手織り織機に動力を付けたシンプルなもの、大量生産には向きませんが、手織りに近い風合いの毛織物を仕上げられる特徴があります。

シオンヘル織機は現在は生産されておらず、同社ではメンテナンスしながら大切に愛用し、また廃業する同業者から譲ってもらうなどして、現在10台のシオンヘル織機を使用しています。

### ❁ 「もう100年続けよう」という決意

現在、葛利毛織工業の専務取締役を務める葛谷聡さんは、父が社長を務める同社を継ぐつもりはなかったと話します。「今でこそシオンヘル織機によるモノづくりが評価されていますが、設備投資ができなかったから使い続けてきたというのが実際です。需要がなくなったら終わるときだな、と悲観的に考えていました」。

ところが、この認識を改める大きな転機が2009年（平成21年）に訪れます。「海外のバイヤーが集まる商談会に参加する機会があり、世界的に知られるヨーロッパブランドのバイヤーたちから賞賛を込めて驚かれました。『今でもこんなに丁寧な作り方をしているメーカーは、ヨーロッパにもない』と。時代遅れだと思っていたものが、実は世界にも通用する貴重なものだった。**価値は自分たちの足元にあった**と気づきましたね。2012年に100周年を迎えて、もう100年頑張ろうと決意するきっかけになりました」。

この決意が、いろいろなものに作用したのではないかと葛谷専務は話します。「いつか会社をたたもう、という気持ちでやっていたら若い人は集まらなかったでしょう。それに、もう100年やろうと考えたら自分の寿命だけでは足りません。だから次の世代のことを、自然と考えるようになったのだと思います」。不思議と若い働き手が集まるようになったのは、ちょうどその頃からだそうです。

### ❁ 断っても「ここで働きたい」

会社見学を訪れる学生は多いそうです。

「近年では年間200人ぐらいが見学を訪れています。**希望者は基本的には断らずに対応しています**。

今では慣れたもので、ひと通り業務内容を紹介し、完成品まで見て触れる小1時間の見学ルートを設定してあります」。

見学後に「募集をしていませんか？」と打診される機会も増えます。「小さな会社ですから積極的に雇うことはできません。必ず断って弊社よりも安定した他社を紹介しています」と葛谷専務。同社は現在も積極的な募集活動はしていないそうですが、ここ数年は若者の採用実績を重ねています。「断った人のうち何人かが『とにかくここで働きたい』とまた訪れてくれて、なかには雇うとも言っていないのに、先に東京から引っ越してきた人までいます。そこまでされては断れない。そうして徐々に若い人が増えていきました」。



左は専務の葛谷聡さん、右は葛谷幸男代表取締役。

## ❁ やりたいことがやれる環境

1度断った人が、やっぱり働きたいと戻ってくる。自然と熱意のある人が増えるという、理想的ともいえる構造で若手を採用している葛利毛織工業。「弊社がこれまで残ってこられた要因のひとつは、顧客からの要望に応える受け身の仕事だけではなく、**こちらからも提案**しているという点でしょう。また、普通は売れるかどうか重要ですから面白い商品でもなかなか開発に踏み切れない。しかし弊社は『とにかく良いものを作って、それを市場にぶつけてみよう』と考えます。そのうえ、**小さな会社だから仕事のスタートからフィニッシュまで少ない人数で行っています。こうした業務内容を、会社見学でも分かるように説明しています**から、若者から見れば『やりたいことが、ここならやれる』と感じるのかもしれない」。

葛谷専務はさらにこう続けます。「**今の若者のなかには、経済的な点に人生の価値を置いていない人が多い**ように感じます。彼らが大事にしているのは、やりたいことができるかどうか、ではないでしょうか」。



趣のある正門は100年前のもの。

## interview

### 若者インタビュー



製造・企画 **水野太介**さん

### 見学で感じた期待どおりの仕事

約5年前に入社した水野さんは、美大で織物を専攻して修士課程に進み、卒業の段階になって葛利毛織工業を見学したそうです。「いくつかの会社を見学したなかのひとつがここでした。他は新しい機械を使っていたり、生産するものが限られていたり、なかなかピンとくるところがありませんで

た。葛利毛織工業は、製品の高品質さで評価されており、良いものを作れようということ。そして**小さい会社だからこそ**、個人の請け負う仕事の範囲が大きく、最初から最後まで見届けられようという点に魅力を感じました」と水野さんは述懐します。

水野さんが葛利毛織工業へ就職の希望を伝えると1度は断られたものの、やはり自分のやりたい方向に合っているのはここだと感じ、再度就職したい旨を伝え、働くことになったそうです。

「想定していたとおりの仕事内容で、幅広くテキスタイルに関わっています」。



小道具を使い、素人にも分かりやすい工場見学を。

## ❁ 保身を考えるとでは衰退する

採用した若者が成長していく過程は、全てが順風満帆とはいきません。やむない事情で退職する人もいれば、同業他社からの引き抜きもあったそうです。「最近では優秀な女性スタッフが他社に移りました。相談されて、こちらが痛手ですから悩みましたが、結局送り出すことにしました。彼女を無理やり引き止めることもできたと思いますが、それでは自分勝手な保身になります。だから彼女がそう考えたのなら、それが必然なのだと考えるようにしました。その後、彼女は仕事が終わった後に手伝いに来てくれるようになり、また、彼女が開発した設計は今も弊社の財産になっています。今となっては産地として、良い協力関係が築けたようにも思います」と葛谷専務。

また一方で、期待する若手には他社への出向という形で経験を積ませたそうです。「ニュートラルな技術を身につけてほしいと思い、期待する若手を1人、信頼する外注先へ1年間預けました。この仕事はそれぞれにやり方があって、それぞれ正しいと思っているものですが、そんなはずは絶対ありません。**正しいものが見えない状態になってほしくない**と思って、外で修行をしてきてもらいました」。

高齢の職人が支えている地場産業への配慮も見えます。「その外注先はご年配の夫婦2人でやっているところですが、若者と一緒に働くことで活力になって、廃業を遅らせることに繋がるかも、とも思いました。産業全体への貢献にもなれば幸いですね」。

また、弊社で生産した生地のスーツを愛用している人に会えることもあって面白いですね。大学時代は独りよがりモノづくりをしていましたが、今は仕事として責任感を持てるようになりました」と水野さんは生き生きとした表情を見せます。

水野さんは続けて、働く環境の大切さについても教えてくれました。「私が学んだ学校は、自分の技術を高めたいという人が集まっているところですから、仕事をしながら**勉強できる環境**かどうか、**師匠と呼べる人がいる**かどうか、就職先を選ぶ上で大事なポイントとなると思います」。

